笑談笑発

井上ひさし対談集

暉峻康隆
矢代静一
山口昌男
松田　修
D・キーン
鶴見俊輔
遠藤周作
田辺聖子
江國　滋
丸谷才一

講談

笑談笑発
井上ひさし対談集
© Hisashi Inoue 1978

講談社文庫
定価380円

昭和53年11月15日第1刷発行
昭和61年8月5日第7刷発行

発行者——野間惟道
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版———豊国印刷株式会社
印刷———豊国印刷株式会社
製本———株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えします。 (庫一)

ISBN4-06-131521-8 (1)

講談社文庫

対談集

笑談笑発

井上ひさし

講談社

目次

江戸の庶民文化を探る　暉峻康隆　七
笑いの裏おもて　矢代静一　三一
近代日本の道化群像　山口昌男　七九
戯作の可能性　松田修　一〇九
戯作の精神　ドナルド・キーン　一三九
笑う透明人間　鶴見俊輔　一六七
神とユーモア　遠藤周作　一九三
方言なしに笑いは書けない　田辺聖子　二二三
俳趣と諧謔　江國滋　二四五
パロディ精神ってなんだろう　丸谷才一　二八三

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

笑談笑発

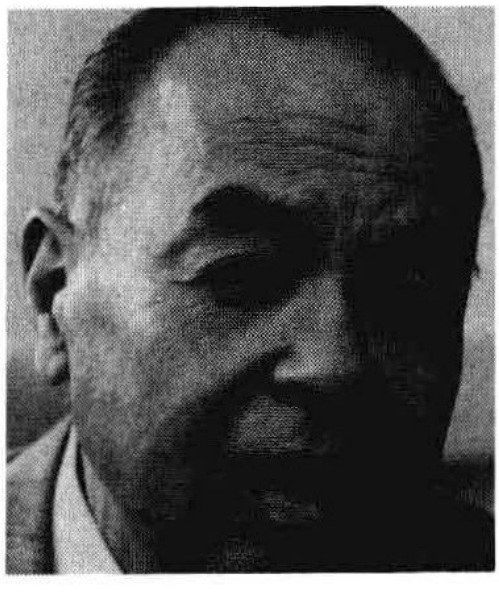
井上ひさし対談集

井上ひさし

昭和九年山形県生れ。小説家。劇作家。
上智大仏語科卒。
ＮＨＫ「ひょっこりひょうたん島」の脚本を
五年間書く。
四十七年「手鎖心中」で直木賞受賞。
主著、小説―『ブンとフン』
『モッキンポット師の後始末』『青葉繁れる』
『四十一番の少年』『偽原始人』
『新釈遠野物語』など。
戯曲―『表裏源内蛙合戦』
『道元の冒険』（岸田戯曲賞、芸術選奨新人賞）
『天保十二年のシェイクスピア』
『藪原検校』など。

江戸の庶民文化を探る

井上ひさし
暉峻康隆



暉峻康隆

明治四十一年鹿児島県生れ。早大国文科卒。
文学博士。
近世の小説、俳諧と、研究分野は広いが、特に西鶴の研究家として高名。
昭和十三年から母校で近世文学を講義。
現在、早大名誉教授。
主著、『西鶴—評論と研究』
『定本西鶴全集』（共編）『江戸文学辞典』
『文学の系譜』『蕪村論』
『すらんぐ』『好色』
『落語芸談』『落語の年輪』など。

庶民とはなにか――

本誌　暉峻先生が江戸文学に興味をお持ちになり始めた動機あたりからお聞かせいただけませんか。

暉峻　私はね、浄土真宗の家に育って、長男だから坊主になるはずだったんです。浄土真宗というのはほんとうに庶民の宗教です。いつも庶民のことを考えてなきゃならない。庶民のために出発して、庶民のために生き続けてきた宗教だから、何となく国文学を勉強しようと思ったんじゃないんです。大学時代、私と一緒に石川達三君がいましたし、一年上の国文科には丹羽文雄君がいたり、火野葦平君、火野君は亡くなったけど、それから尾崎一雄さん、井伏鱒二さんもまだいたんですよ。あのころは小説書かなきゃ人でないような時代でした。昭和初期ですからね、文学をやらないと社会運動ですね。だから私も小説を書いていたんです。ところが、去年『山口剛著作集』というのが中央公論社から出ましたが、あの先生がたいへん魅力的な方で、黄表紙の講義や西鶴や近松の講義を聞いているうちに、だんだん先生に惚れて、先生について勉強したいと、まあそんなことが近世文学をやるほんとうのきっかけでしょうね。貴族文学なんか、やっぱり性

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に合わないんですよ。

井上　東京のお寺さんですか。

暉峻　いやいや鹿児島の大騒動している志布志です。志布志湾が巨大開発の拠点になって、石油コンビナートを持ってくるというので、漁民や農民が大騒ぎをして、とうとうやめさせちゃったんです。その漁民や農民というのは、うちの門徒なんです。門徒が反対するなら、ひとつ力を貸そうじゃないかというので、私の弟の住職がリーダーの一人になって反対運動をやったんです。私がそのまま住職になっていれば当然私がやることを弟がやっているものですから、私もほっとくわけにいかないのでやってるんですよ。

井上　浄土真宗のお寺さんを中心にして、門徒衆がそれをけったわけですね。

暉峻　そうですね。

井上　門徒無用（問答無用）というわけですね。

暉峻　門徒というのは皆な農民か漁民で、その人たちが実に強烈に反対するんです。誰か政党の指導者がきてもだめですね。住民が自分の生活を守るという、そこから出てくる力でなければ、とてもだめですよ。われわれはただ方法を考えてあげるというだけで、実際の力というのは、やはり住民自身の力でないとあかんですね。

住民自身の力といえば、寛政の改革でおもしろい話があるんですよ。寛政の改革までは黄表紙、狂歌、川柳の全盛期でしたが、江戸の銭湯は男女混浴ですよ、同じ湯船に入るんです。それで寛政の改革で松平定信が「近ごろは江戸の盛り場の銭湯でも混浴であるのはけしからん、別々にせよ」と町触れを出したんです。それは口達（こうたつ）というのがありますね、文書でやるのは決定的な

もので、その前に名主や何かにいうやつ。そうすると江戸の銭湯の組合連中がおそれながらと訴えているんですよ。「別々にいたしますと営業相成りたち難し」（笑）おかしいねえ。つまり庶民の要求があるんですよ。それでお触れ書きがまた出まして「営業相成り難く候と申すももっともなり」と。それでそのままになっちゃったんですよ。だから式亭三馬の『浮世風呂』で女湯と男湯を書いたのは、あれは口達にしたがって書いたんです。ほんとうは日本橋あたりでも、皆な混浴だったんです。

井上　松平定信さんという人は非常に変な人だと思うんです。将軍の房事の回数を決めるとか、畳を全部安いのに変えちゃうとかしましたね。それから山東京伝なんかを手鎖にしますね。それで自分が老中をやめると山東京伝にサインをしてもらう、だから愛読者ではあるんですね。何かちょっとおもしろいというか、変な人だという……。

暉峻　そうですね。やっぱり人間というのは何か権力の座につくと、自分のほんとうの好みを隠すのですね。権力の座から降りると、佐藤さんも髪の毛をぱっと今風に伸ばしたりして、あれ、伸ばしたかったんだと思うんだ。でも総理大臣が長髪じゃまずいからね。それで天保の改革のときに水野越前守が、今度は板仕切りをつくらせているんです。ひとつ湯船に板仕切りをつくって、こっちは女湯、こっちは男湯としたんだけど、でもね、下のほうから手が入るの（笑）。

井上　ぼくは一番不思議なのは、権力側がなるべくそういうことをやらせまいというので、いろいろやってきますけれども、なぜ偉い人というのは庶民が自由に性をたのしむのがこわいのか、それが非常に不思議です。

暉峻　いや、自分たちにできないからでしょうね。それで川柳も、初期の川柳は『末摘花』でも

そうですけれども、実に健康なんですね。自分の好きなみいちゃんがお風呂にいくと、それってんで、自分も手拭ぶら下げて行って見合いするんですから。これは確かなこと。おへその具合から全部観察してそれでいよいよ決定するんだから、たいへん健康な状態だったと思いますね。いまごろはお化粧をうんとして、妙な修正写真なんか見せたり。江戸の庶民はナマを見るのですよ、実に確かな手応えがあったろうな。

井上　ぼくらも学生時代は四谷にいたんですけれども、四谷ですからいろんな夜の商売の女性が多くて、彼女たちが銭湯に行くのを寮の窓から見ているんですよ。来た来たっていうとすぐ用意したのを持って、ついて行く。それでわざと風呂場から水を向こうに飛ばしてみたりしたんですけれどもね。

暉峻　だから明治二十年来ですよ、ほんとうに女湯と男湯が入口も湯船も完全に別々になったのは。警視庁令で初めて実現したんです。それほど庶民の要求というのは、権力だけじゃだめなんですね。だから江戸時代は法度（はっと）政治といわれるくらい非常にきびしい法度があったりしていますけど、庶民はそれほどじゃないんですよね。枕絵だっていまでも献上ものが残っていますからね、十二ヵ月書いたのが。あれはやっぱり大名や大身の旗本、将軍家なんかの若い、若いといっても十二、三でこし入れするのですから、そのときに持たせてやるんです、性教育のために。だから日本は体位が十二ヵ月ですよ。あれを見て男と女はこうするものだということを絵で教育するために、嫁入り道具に持たせる。そうすると嫁入りが近づくと御下命があるわけだ、普段は禁止しておいても。だからまあ禁止令は有名無実だったんですよね。

井上　これは明治に入ってからですけれども、乃木大将の奥さんの静子さんが、自分の姪の森て

る子さんというかわいがっている子がいて、その人に結婚したらこれだけは守りなさいという性教育のコツを教えていますが、あれは静子さんというのは当然江戸末期の生まれですから連綿と続いているんだろうと思いますけれども、変な声を上げるなとか、紙をもじゃもじゃする音をたてるなとか、終わったら下女の手じゃなくて自分で手拭をしぼって、顔を見ないように殿方に渡しなさいとか、非常に謹厳実直な乃木将軍家における、伝統といってもいいと思いますけれども、そういうのがあったというのは、何か江戸時代の人というのは、非常にたてまえと本音みたいなものをうまく分けて、けっこう……。

暉峻　ええ、そうですよ。実に気楽に暮していたんですね、庶民は。庶民というのはいつの時代でもね、失うものがないからだと思いますよ。好きほうだいなことをしても、それで別に権威が下がるわけじゃないし、権威なんか初めからないんだし、財産だって職人だったら宵越しの金は持たないんだし、失うものがないと腹いっぱい笑い、したいことはできるわけですよ。だからたてまえは、結婚というのは庶民でも主人か、親の命令で結婚させられるわけだけど、ほんとうの庶民というのは、元禄時代でもそうですけれども、すぐかけ落ちですね。手に手をとって知らぬ他国に行って共かせぎです。そういうのを走り夫婦（みょうと）と元禄時代はいうんです。これは何もないですからね。家屋敷があるわけじゃないし、農地を持っているわけじゃないから、何もないから着のみ着のままで、さっとどこかにいって……。

井上　モリエールというのは大体元禄ぐらいにあたりますか、だいたい同じ頃ですね。モリエールに短いばかばかしいおもしろい芝居がありますが、ケチな親父に娘がいるんですけれども、持参金をやるのが惜しくて、親父がかけ落ちしてくれれば持参金を渡す必要がないというので、婿

さんに将来なるべきやつと、自分の娘をすごくけしかけて、かけ落ちさせる芝居があるんですけれども、それと同じようなことが、江戸時代にあるんですね。走り夫婦というのは初めて伺ったんですけれども、何かその辺は非常に気楽ですね。

暉峻　ええ、とても気楽。それで共かせぎが原則だし。そして江戸時代の持参金制度というのは、ヨーロッパも中世にはありますよ。江戸時代の持参金制度というのは非常に不合理なようですけど、せっかく娘を一人前に育てておいて、おまけにその家の財産に見合った持参金をつけてやらなきゃなんない。これがしきたりです。それでおもしろい話があるんですよ。新井白石は合理主義者ですから、持参金をやめさせろと、一時やめたことがある。そうすると白石の娘は全然もらい手がなくなっちゃって、困ったという話があるんです（笑）。持参金は不合理だと一応考えるでしょう。でもね、亭主が離縁するとき、持参金と嫁入り道具はそっくりそのまま返さないと離縁できないしきたりがあるんです。

井上　いまのアパートみたいなものですね、敷金と……。

暉峻　つまり敷金なんですよ。ところが大体の亭主は、商売の元手なんかに女房の持参金を使い込むのですよ。そうすると離縁したいけど元どおり整えられないから、あきらめて暮らす亭主もいた。だから亭主もかわいそうなんですよ。別れたいんだけれども追い出せないという状況があって、ある意味では妻の座を確保するための砦ですね。

井上　男の性をよく見抜いた方策ですね。

暉峻　そうそう。

井上　先生が浄土真宗で鹿児島というのはぼくは意外だったんですけれども、江戸文学といいま

すか、そういうものにわりと、ぼくは山形なんですが、地方の人がつかまると、深入りするというのはおもしろいですね。

暉峻　泉鏡花がそうですね。あれは金沢で紅葉先生そこのけで江戸賛美でしょう。江戸芸者から吉原の花魁まで。だから地方の人間が深入りすると、ほんとうに深入りして本物になっちゃうんですね。

井上　ぼくの場合は、江戸というものに非常に興味持ったのは、東京へ出てきて江戸も何も知らないわけですね。高等学校では日本史をやらなかったものですから、全く知らないんです。東京へきて、ある日ふと浅草に行ったら、浅草というのはぼくが生まれて育った田舎町の、お祭りという感じがするのですね。それで非常に浅草が好きになる。そのうちに、浅草を調べていくと、どうしても江戸にぶつかっちゃうんですね。だから女房をもらうなら浅草からもらおうなんてばかなことを考えて（笑）。それで浅草橋にそれらしいのがいて結婚したら、そこの親父さんなんか、いまでも風呂屋のことを湯屋とか、床屋のことを髪床とか、朝は味噌豆なんて、ぼくらにしたら非常にまずいものを食ってるわけですね。だんだんそういうところから、ぼくは江戸というのが好きで深入りしてきたんです。だから外様が江戸にほれ込むとえらいことになるという感じがしますね。

暉峻　そうですね。江戸の旗本というのはほれ込まないわけですよ、自分たちだから。そして逆に地方に対しての優越感は持っている。田舎侍を新五左だとか何とかいって。ちょうどわれわれとは逆の状態ですね。だからね、織田作之助君が『夫婦善哉』で昭和十五年に最初の賞をもらう前まで、彼はほんとうに尾羽打ち枯らしていましたよ。昭和十四年の暮れごろ、新宿で二人で飲

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com